

令和6年度 第3回小田原市社会教育委員会会議概要

- 1 日 時：令和6年（2024年）11月28日（木）13：30～15：30
- 2 会 場：小田原市生涯学習センター本館 第2会議室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、石塚委員、加藤まゆみ委員、齊藤委員、高橋委員、松本委員、箕輪委員
- 4 職 員：大木文化部長、諏訪部文化部副部長、田村生涯学習課長、蓑宮生涯学習課副課長、鈴木生涯学習課副課長、遠藤生涯学習課副課長、菰澤生涯学習課担当監、一寸木生涯学習課生涯学習係長、塚本生涯学習課社会教育支援員、廣瀬生涯学習課社会教育支援員、渋谷生涯学習課主査

5 傍聴者：なし

6 概 要

（1）開会

田村生涯学習課長が開会した。

（2）文化部長挨拶

大木文化部長から挨拶をした。

（3）委員紹介及び職員紹介

資料1に沿って委員が自己紹介し、座席表に沿って職員も自己紹介した。

（4）報告事項

ア 前回の社会教育委員会（書面会議）について

資料2に沿って蓑宮生涯学習課副課長が報告をした。

（5）協議事項

（1）今後取り組む研究調査テーマについて

資料3に沿って蓑宮生涯学習課副課長が説明をした。

【木村議長】 初めて出ていただいた方のためにも、テーマの検討作業のイメージについて、もう少し砕いた形で説明できるか。

【蓑宮副課長】 資料裏面の下のところに生涯学習課の事業がある。全ての事業を検討するのは難しいので、テーマの方向性として、まず、学びとの出会いが重要であり、次に、どうやったらそれを続けていけるか、さらに、仲間を見つけて皆でつなげていく取り組みができると、生涯学習が豊かに人生につながっていくと考

えている。今行っている事業の中で、キャンパスおだわらをはじめ、けやきを会場としているいろいろなサークルが活動しており、そうした活動を支援していく取組みを、この3つの視点を使って、より充実したものにはできないかと考えており、そのようなところで検討いただけないかと考えている。

【木村議長】 学びとの出会い、継続、つながりについてのイメージ図が出ているが、対象となる事業についての具体的なものが何かあるか。

【蓑宮副課長】 次回の社会教育委員会議を2月に予定しており、説明し、御意見をいただきたいと考えている。

【齊藤委員】 テーマについては、生涯学習の起点に戻ることから良いと思う。また、検討課題の仕分け方についても、生涯学習について再考するという事で、この3段階で良いと思った。その上で、検討対象の領域については、例えば、担当者が市民学校の事業に手を焼いているというように、1事業に負荷がかかり過ぎているという課題がある。事業について、いま、どの段階にあるのか、どのような課題があって、理想と現実の間にどの程度の乖離、課題があるか、それらは各々やっている中で知っていると思うので、作業仕分けという感じになるかと思うが、洗い出し作業が必要になると思う。その上で、それらをどのようにしたら乗り越えられるのか、より改善になるような内容を提案できればよいのかな、と思う。

【田村課長】 次回については、どのような課題があるのか、見やすい形でお示ししたい。齊藤委員がおっしゃったように、大きなウェイトを占めている市民学校があり、地域における課題解決の人材育成をゴール設定しているが、ただ、生涯学習をしている人にとっては、地域の人材育成となるとハードルが高いという方もいる。学びたい、友だちを作りたい、仲間を作りたいという生涯学習の根本的なところ、そこに力をシフトしていきたいという思いがあるので、そうしたところで皆様からご意見をいただきたいと考えている。

【有賀委員】 テーマに基づいた参考事例として私がイメージしたことをお話ししたい。資料2の報告の中にもあり、意見として出したが、私が担当する子育て広場で、10月の秋まつりの際に、市民学校の学生2名が体験に来られ、そのうち1名が、12月のクリスマス会にも参加したいという連絡があった。それは、このテーマの検討の視点で言うと、「出会い」は子どもとの楽しい時間であり、「継続は」次回も活動したいということ、「つながり」はメンバーや子どもたちとのつながり、といったように、今期のテーマの一例になると感じた。資料3の今後の進め方の(4)にあるが、最終的には各種事

業に反映するための報告書、とあり、実践に結び付けるということで必要だと感じた。3つのテーマでの検討については、具体的な事業があるので、検討作業のイメージも分かりやすく、「報告書」として有効活用できる形でまとめられたら理想的だった。

【木村議長】 分からなかったことが分かる、習得するだけでも生涯学習といえる。生涯学習の意味合いはとても広い。事務局では、例えば生涯学習とはこんなものだったものは何かあるか。

【蓑宮副課長】 事業の様子などを写真や映像も交えながら示すのが、イメージしていただきやすいと考えている。また、機会があれば、実際の事業にお越しいただき、参加してもらうのも良いと思う。

【木村議長】 コロナによる地域の疲弊は否めない。なかなか元に戻るの難しい。生涯学習事業が地域にもたらす効果にしても、なかなか見えにくい。市民学校も一生懸命やってくれてはいるが、それが地域にどのように入っているのかが見えない。もったいないと思う。

【加藤まゆみ委員】 アフターコロナの中、全国的に読書週間が始まっており、読書がもたらす効果は大きいと思う。学びとの出会いということで、学ぶ楽しさを味わいながら社会教育につなげていくように持っていかなければならないが、地域の担い手となるとレベルが高い。皆で楽しみ、こういう時代が迎えられてよかったというように、いろいろなことが戻っている中で、皆で歌を歌ったり、皆で何かをすることの楽しさを味わいながらそれをたくさんしながら社会教育につなげていくことが学校でできることかなと思う。つながりの支援についてはある程度のバックアップがないと継続していくまでにはいかない。ましてや地域の担い手とまでなると難しいとは思う。

【高橋委員】 検討作業のイメージの中に、生涯学習の現状認識とあるが、これをどこまで分析しているかは疑問である。敬老会でも健民祭でもそうだが、人を集めて楽しませたい、というところが飛んでしまっている。汗をかいて会員を喜ばせよう、となっていない。コロナ禍を経て、皆で楽しんでもらうことが小田原の中でどこまで復帰できているのか。小さい子どもが役員さんに手ほどきを受けて育っていくという、その育っていく先が大人になってから、あーこういうことしてもらったという、ように他の人たちに返していく、こういうのが担い手だと思う。お互いに汗をかいて、というのがないと、担い手不足は解消しないと思う。やはり中身の問題だと思う。こうしたことがどこまで復帰できているのか、これを我々が元気なうちに 100

に戻していくのが願いである。

【木村議長】 一昨年、富水の研修視察で那須塩原市に行ってきた。那須塩原では自治会加入率が40%代と、自治会が無くなるという話も出ている。そんな中で、専ら小中高生を取り込むことに注力していた。小田原市も70%切っているので段々とそうになっていく。3つのイメージがあるが、子どもたちに注力したもので良いし、それが最終的につながっていくようなものを考えていかなければいけないと思う。

【箕輪委員】 地域防災においても問題点はみな一緒だと感じた。どこかの組織に何かを任せてしまうのは負担が大きい。12月広報の中で「新しい学校づくり」検討のワークショップの記事が掲載されていて、泉中と城北中学校区の保護者が集まって検討している記事があった。保護者の方も子どもに関わることでアンテナが高いし、行動も早い方が多い。地区防災を考えると避難所は小学校にありながら自治会等は分散しているということが課題として横たわっている。ところが、その記事のように、その2つの中学校単位で検討していることが、こうした課題を一気に解決できる単位だと思った。日本各地の公立の校長先生の面白い取組みをピックアップしている「夢見る校長先生」というドキュメンタリー映画があり、教科の枠、地域課題の枠を飛び越えて子どもたちが学んで、それを地区の大人が支えているという内容がとても盛り込まれている映画だった。今の問題は、それが解決の糸口になるのではないか。大人が積み上げてきた今の状況をこのまま続けていくのは難しいというのがこの検討だと思う。皆が注力できて、みんなが集まれる単位はどこか、そのきっかけになる行動が示せる場所はどこか、を考える時ではないか。小田原市は市域も広く、そこに行けないなど、けやきのイベントにも継続して集うことができない、といった課題も、地区でやればそれが例えば地区防災になるのではないかと、といったことを考えつつ、自分の中で堂々巡りしている。地域のつながりといったことを考えた場合、やはり近くにいる人が関係性を築いていきやすいと思うので、地区の自慢、魅力を起点とした学びができるとたくさんの方が集いやすくなるのではないかと考えた。

【松本委員】 書面でも書いたのだが、世代間交流に力を入れていかなければいけないと考えている。出会いの創出にはイベントも大事だと思う。年長者から学ぶことは多く、また、年長者も今さらながら気づかされることも多い。そういったプログラムがないかと強く思う。

【石塚委員】 地域でお囃子をやっており、地域の幼稚園に教えに行っていたが、コロナ

があり、幼稚園が休園になったりして、子どもたちがどこにいるのかが分からなくなった。どこに対してアプローチするかが課題になっている。また、前羽地区の道祖神における人形山車もコロナで止まってしまって、5年ぶりに復活させようとしたが、それも今後の継続が悩ましい問題となっている。太鼓もそうだが、大人の背中を見て子どもが返していくという、自分もそういう気持ちでやっている。楽しかった記憶があるから今の中高生もやってくれている。地域の課題解決についても、PBL、課題解決型学習のように、楽しいコミュニティができて、そのコミュニティの中でいろいろやっていたら課題解決になったというようなストーリーが作れば良いなと思った。

【齊藤委員】 皆共通しているのは「小田原の生涯学習の新たなつなぎ直し」がキーワードかな、と思った。

【笹井副議長】 個人的には、抽象的ながらも「出会い」「継続」「つながり」に着目したのはすごく良いことだと思う。

大学の学生たちにも、生涯学習には3つのパターンがあると言っている。1つ目は、一人で学ぶパターン。読書やテレビ、ラジオ、インターネット、スマホ、などで情報収集するもの。2つ目は、仲間と学ぶもの。つまり他者との関わりの中でお互いに成長していく、これが社会教育だとも思う。3つ目は、教育機関で学ぶもの。学校などや、おだわら市民学校なども含めて組織体の中で学ぶものに分けられる。ご指摘いただいているとおり、コロナにより2番目のつながって学ぶことが衰退してきている。また、コロナ以前からあるが、孤独や孤立、若者の居場所がないといったこともある。社会教育は接点で接して、対話をして情報共有をして、これ面白いねというテーマが出てきて、このテーマについて議論していくというのが社会教育の流れになっているのだが、コロナ以降、接する機会すらなくなっている。他者と接する場、居場所がその人の生活する場の近くにあれば良いと思う。世間話から始まって、そういう細々したものが社会教育といえる。形になっているものよりも形になっていないものの方が多く、講座とかだけではなく、生活の中で出会ったものに対して興味をもっていくことが社会教育だと思う。担い手の話が出たが、そういった場の中に、ファシリテーターというか、コーディネーターがいて、ちょっと面白いからやってみようかといったように、つながり始めるというのが大事だと思う。

「公民館のしあさって」という本が出ているが、1年ほど前、沖縄の繁多川公民館に行ってみたことがある。1階が図書館、2階が公民館で、オープンスペースがあり、そこに色々な人が出入りできるようになっている。おじいちゃんが将棋や囲碁をやっていて、そこに若い人がやってきて、祭

りの話を始めたり、エイサーの話になったりして、これはある意味の世代間交流であり、新しい学びが生まれたりしている。そうした、インフォーマルな学びがつながっていくことが大事なと考える。コロナ禍で落ち込んだ人とのつながり、関わり合いが生まれるような環境があり、その中からリーダーが出てきたりする。防災などは特にリーダーの存在が必要である。そうしたところから社会教育というのは活性化していくのではないかなと思っている。ぶらっと集まって、「出会う」、その中から目的を見つけて、それが続いていくことで「継続」となる。「つながり」は接して関わり合うことが大事で、そうしていくことによって、お互いが前向きになり、お互いが成長発達することにつながっていく。一人で学ぶ、仲間と学ぶ、教育機関で学ぶの3段階の学びの話をしたが、3つ目の教育機関は一人や仲間も全部込々になっていて、学校とつながることも実は大事なことで、学校の外の人たちとつながるやり方はいくらでもできると思う。それもひとつのやり方かなと思う。

【木村議長】 様々な意見をいただいたが、今日は、皆が思っていることを言ってもらって本日はここまでとしたいと思う。その他事務局から何かあるか。

- ・事務局から、第56回関東甲信越静社会教育研究大会神奈川大会の事務連絡、次回会議は2月ころを予定している旨連絡。
- ・田村生涯学習課長から、けやきのイベントの案内を配り、周知を依頼した。

【木村議長】 それでは、本日の社会教育委員会会議はこれを持ちまして閉会とさせていただきます。

閉会